

批評及び紹介

イークヴァル氏「甘肅省西

邊に於ける漢・回・藏三民族
の文化的交渉に就いて」

榎 一雄

Robert B. Ekvall; Cultural Relations on the
Kansu-Tibetan Border. Chicago, 1939 pp. xiii
+ 87. The University of Chicago Publications
in Anthropology. Occasional Papers, No. 1.

著者イークヴァル氏は、その所謂 Kansu-Tibetan
border に生れ十四歳までを其處に過し、更に一九二
三年から一九三五年までの十二年間、宣教師として

この地方の布教に従事した人である。本書は即ち氏
が前後二十六年に亘つて聞見した所に基き、洮河の
流域並びに黄河上流域一帯、所謂 Ando 地方に於
ける漢・回・藏三民族相互の文化的交渉を叙述したも
ので、もとシカゴ大學社會學科のゼミナールに提出
せられた報告である。

本文は六章に分れる。第一章“The Kansu-Tibe-
tan Border” (pp. 4-13) は全書の總論であつて、取扱
はんとする地方の地文・人文を概観し、人種や社會經
濟生活を各々異にする漢・回・藏三民族が密接な交
渉を有してゐるこの地方の研究が、甚だ興味ある所
以を説明してゐる。

第二章“The Chinese and the Chinese-speaking
Moslems (pp. 14-28) は、狄道・河州地方に於ける漢

イークヴァル氏「甘肅省西邊に於ける漢・回・藏三民族の文化的交渉に就いて」

第二七卷 四四一

人と回民との特質・生活状態及び兩者の交渉を述べ、兩者が分離反目してゐて、融合一致し難い事實を指摘してゐる。著者は兩者の信仰・習俗・職業の相違を詳細に叙述し、更に、回民の數は河州最も多く、「支那のメッカ」と稱せられ、狄道・岷州之に次いで居ること、支那人の人口増加率は壓倒的であるのに反し、回民の増殖率は甚だ少いこと、政治的な原因から起つた回民の叛亂が常に宗教的な聖戰と化して擴大すること等を述べてゐる。

第三章 “The Chinese and the Sedentary Tibetans” (pp. 29-47) は洮河の上流域（岷州—洮州）の定住農耕のチベット人と漢人との交渉を考察してゐる。岷州—洮州間の洮河沿岸は海拔八、〇〇〇—九、〇〇〇呎、直に高峻なる森林地帯に迫られてゐるが適當な雨量に恵まれて農業が行はれ、西藏人・漢人の村落が混在してゐる。各村落は大抵二〇—三〇家族から成り、漢人の村落の家族は *Qian system* によつ

て強く結合せられてゐるが、甚だ分立的であるのに對し、チベット人の村落は明確な *Qian organization* は無いけれども、協同的色彩が強い。この傾向は、各村落共有の森林・牧場の利用、其他あらゆる方面にはつきりと窺はれる。しかしチベット人の人口増加率は漢人に比して甚しく少く、殊に病氣に對する抵抗力が非常に弱いことと、その兒童をラマ寺院に入れることなどのために、人口は寧ろ減少しつゝある。されば漢人の進出は著しく、漸くチベット人を壓倒しつゝある。しかし佛教徒である漢人とラマ教徒であるチベット人とは、その宗教に於いて大體似てをり、チベット人の間に進出した漢人はラマ教の信仰に容易に従つてゐるから、兩者の融合は極めて圓滿であつて、對立反目は見られなす。従つて兩族の通婚も盛んに行はれてゐるが、多くは漢人の男子がチベット婦人を娶るのであつて、漢人の女子は決してチベット人に嫁しなす。この地方の漢人がチベット

風の衣服を纏ひ、その使用する支那語の中に多くのチベット語の取入れられてゐることなどは、チベット文化が漢人の中に浸入してゐる例であるが、支那文化のチベット人への流入は一層著しい。袴 (Trousers) や襯衣や箸の使用の如きはその一例であるが、

最も注目すべきものは炕⁽¹⁾の使用と姓を稱することである。炕は漢人の部落から遠く離れた地方のチベット人には知られてゐない。チベット人の家庭にある炕の数は、とりもなほさずその支那化の程度を示してゐる。チベット人は本來姓氏を有せず、名を有するのみであつて、特に必要のある場合は、その居住する村の名や部族の名を附して、他と區別してゐたのであるが、漢人に倣つて姓を稱するものが出て來てゐる (pp. 34, 42, 45)。漢人が死者を厚く土葬するのに對し、チベット人が之を火葬にしたり、山腹に曝して鳥獸の喰ふに任せたり、川に流してしまつたりする點⁽²⁾ (pp. 46, 47) や、チベット人が運搬に決して

車を使用しない點などは、全く支那人と反對であるが、著者の結論によると、全體から觀てチベット農民の村落は、極めて平穩にそして急激に支那化しつゝあるのである。

第四章 “The Moslems and the Nomadic Tibetans”

は西部ステップ地帯に遊牧するチベット人と、そこに赴いて貿易する回民の隊商との交渉を觀察したもので、それら隊商の組織・貿易の方法等が記されてゐる。回民の賣込む商品は雜貨・火器・穀物・茶其他の贅澤品等であり、之に對しチベット人は羊・馬其他の家畜並びにそれに附隨した毛皮等を賣出す。冬期にはチベット人も亦隊商を組織して支那内地に赴いて貿易するが、その商品は鹽・毛皮等が主であり、その出張の時期は冬の初めの二、三ヶ月の中に限られてゐて、回民隊商のそれが三ヶ月から二年に互るとは比較にならない。隊商の規模に就いても同様で、回民のそれは二、三十人から四、五百人に及ぶこ

とがある。チベット隊商の求むるものは穀物であり、更に商販に赴く動機は全く生活の必需品を求めためであつて、儲けんがためのものでないことに注意しなければならぬ。さて著者はかゝる交渉の結果生ずる文化的影響として、(一)回民商人の生活のチベット化、(二)チベット語及び支那語の相互への混入、(三)支那語の混用及び支那製品の使用に基くチベット遊牧民の支那化、(四)特に回民が特定の食物を嫌忌する風習のチベット人への傳播等の事實を擧げてゐる。

第五章 “The Sedentary and Nomadic Tibetans” (pp. 63-82) は Tibetan Boderland の定住農耕のチベット人とそれ以西の高原に遊牧するチベット人と生活状態の比較を試みたもので、全篇の中で最も興味がある。農耕チベット人の村落は十二、三戸乃至七、八十戸から成り、耕地・宅地を私有する他、各村落共有の牧場と森林とがあつて、森林からの木材の

伐採には制限があるが、牧場の使用は全く自由である。家屋は互に近接して建てられ、屋根の平らな二階建の土屋で、二階は夏期に用ひられるのみである。作物は大麥・豆・小麥・燕菁其他油の採れる一、二の穀物で、豚を飼養する。次に遊牧チベット人は五、六乃至七、八十のテントを連ねて一團と成り生活する。冬期は略々一定の場所に在つて動かないが、五月の初めから十一月の下旬まで、數回移動して放牧し、九月の終りから冬越の準備にかゝる。冬に成ると、隊商を組織して支那内地に穀物を買付けに行く。村落には選舉せられた村長があるが、實權は幾人かの rgal-po [rgal-po, Jäschke] 即ち長老にあり、最後の決定はこれらの長老によつて爲される。遊牧部落の主長は正式の選舉によることは稀で、個人的勢力の有るものが支配權を握つてゐる。尤も部族によつては、主長がなく、長老達の合議だけで事を決するものがあり、世襲的な主長を戴くものもある。但し

世襲的主長の實力は絶對的なものもあれば、全く長老達に左右せられてゐるものもある。又、ラマ僧が

同時に政治的支配者として部族を統一してゐる場合も少くないが、その支配は常に專制的であるので、これから脱したものが多し。遊牧チベット人は一團のテント生活者が一つの部族 (tribe) を形成してゐるのが常であるが、東北チベットには一團のテントが十二に區分せられ、その各々から代表が出て、更にもの中から一人の主長が選出されて絶對的權利を保有してゐるものがある。著者の知る所では、かうした例は二つあり、あらゆる點から考へてこの一團は元來十二の部族が結合し、各々が部族としての特性を失つたものと見るべきだと斷言してゐるが (p. 10)、十二といふのは天文學的な一つの基本數であるし、著者の所謂「あらゆる點」が一向明示せられてゐないから、その結論には遽かに賛成しかねる。又、東北チベットには、數部族に互つて統制力を有してゐる

三人の主長がゐて rgal-po (King) と自稱し、支那人からは王と稱ばれてゐる。

ところが遊牧チベット人は彼等自ら農耕チベット人より優れてゐると信じてゐるばかりでなく、農耕家居のチベット族も自らの生活の劣つてゐることを認め、テントに住み馬や羊を追つて暮らす生活を理想的なものとしてゐるのは興味ある事實である。これらの地方には、冬は村落に生活し、その他の時期は遊牧を行ふものや、同一部族でありながら、一部は農耕を行ひ他は遊牧をしてゐる例が尠くないが、それらの一つ Saitza 族を例にとると、その主長は村落に大きな家を持ちながら殆んどこれに寄付かずにテント生活をなし、rogs-tes 即ち「安住の人」と言はれることを恥辱としてゐる (p. 10)。著者に従へば、この優劣の意識は實際生活から直ちに生じ得るものであつて、相當な面積の耕地を有し家屋に住居してゐる農耕民は、成程外敵の來襲等の危険からは安全であ

るが、その家屋は粗末な土造であるし、その衣服の料として必要な羊毛や毛皮、さては食物として缺かすことの出来ないバターやチーズは、悉く遊牧民から買入れなければならぬし、身體的にも極めて羸弱であつて、病人は遊牧人に比して遙かに多い。これに反して、遊牧チベット人はそのテントは犂牛の毛で作られた非常に高價なもので粗末な土屋の比ではなく、僅かに穀物其他の食料品に多少の不足を感じるのみで、他は衣食共にあり餘つてゐる。そして後者が前者に遙かに優つてゐることは、兩者に交渉を有つたことのある何人も認める所である。

かゝる遊牧生活の優れてゐることと、増加率の多い支那人の進出とのために、定住チベット人で遊牧生活に移つて行くものは甚だ多い。殊に遊牧チベット族は増殖率が少いから、勞働力の不足を補ふために、定住チベット人の遊牧民化を歓迎してゐる。

要するに、Kansu-Tibetan Border のチベット人

はその人種・言語・宗教に於いては同一であるが、生活様式に於いて、農耕・遊牧の二つに截然と區別せられ、就中それに伴ふ物質的生活に於いて、非常な優劣の差異が認められる。

第六章は極めて簡單な結言である。

以上が本書の概要である。著者は學者ではないから本書の記述には學術的な香氣は頗る乏しいのであるが、その大部分は著者自らの聞見をそのまま書き綴つたもので (p. 143)、其點甚だ貴重である。元來、西藏の高原と支那本土との境をなす所謂 Chinese-Tibetan Borderland は、地理學的にも人種學的にも民俗學的にも極めて興味深い地域であつて、學術的調査の成果も少からず公にせられてゐるけれども、少くとも著者の取扱つた地域に就いて、著者と同じやうな着眼のもとに纏めて記述したものは他に無いやうである。⁵⁾

著者の記述した數多くの興味ある事實は、一々こ

ここに紹介する餘白を有しない。しかし最も自分の興味を惹いたのは、遊牧チベット人の間に行はれてゐるチベット語では現在「hasa」地方で既にサインメントになつてしまつてゐる前置字等の子音を half-pronounced consonants 又は variation of breathing

によつて表現し、後置字も亦全部ではないが發音せられてゐる事實である (pp. 66-67)。同様の現象は Khann のチベット方言を始め Labul, Langskar, Balti, Ladak, Pung 等チベット高原周邊にも存することが知られてゐるから、著者の言ふ所は事實であらう。チベット中央地方に於けるチベット語の phonetic decomposition が果してラフナー氏の論ずる如く九世紀の前半期から既に存したものと否かは、今は考究の餘地があるが、⁽⁸⁾ Chinese-Tibetan Borderland のチベット遊牧民の言語がチベット語の古形を遺存してゐることは疑ひなからう。但し、これに關する著者の記述は餘りに簡單である。本書の序

文によると、著者は更にチベット遊牧民に就いての詳細な著書を公にする豫定であるといふから、この問題に就いても遠からず詳しい報告がなされるであらう。(十五・五・十五)

註

- 1 支那のメッカは河州城外に營まれてゐて、城内には回教徒は居ない(本書 p. 14; P. G. N. Potanin, Tangskako-tibetskaya Otkraina Kitaya. 1884-1886, I, p. 169-170; Recherches sur les musulmans chinois par le commandant D'Ollone. Documents scientifiques de la Miss. D'Ollone, 1906-1909 I. Paris, 1911, pp. 235-236; M. Hartmann, Zur Geschichte des Islam in China. Leipzig, 1921 SS. 2-3 S. Index u. d. W. Hochon)。これは左宗棠が回匪平定以後、回漢の分離を斷行した結果で、回民は今では左氏を徳としてゐるとして(D'Ollone, op. cit.; G. Andrews, The Present in Northwest China. Lond. 1921, p. 86)。
- 2 北支那に於ける炕の使用に就いては、島山喜一氏「渤海上の京龍泉府に就いて」、「金初に於ける女真族の生活形態」(小田先生頌壽記念朝鮮論集)等参照。

8 チベット人の死したる遺骸と就つて。ERF, IV, pp. 509-511 (Death and Disposal of the Dead), III, I, pp. 512b (Animals) 更にその遺骸の死後文獻以外の Huc, R., Souvenirs, II, pp. 351-352; I, J. Schmidt, Forschungen im

Gebiete der Akeren Religiosen, Politischen, und Literarischen Bildungs Geschichte der Völker Mittel Asiens. St.-Petersburg u. Leipzig, 1824 S. 147; W. Tomasek, Kritik d. ält. Nachrichten ü. d. slythischen Norden. Sitzungs. d. Wiener Akad. d. W. Philosophisch-Historische Classe, 1838, SS. 749 sq JBRASt, IX, pp. 212-213

Bib. Sin. V. 4371 傅松林「西康建省記」(五十二頁)「周振鶴「西海」(上海、民國二十八年、二八三—二八四頁)等参照。

4 チベットに於ける十二獸環の使用に就つては、東洋學報二十三卷六〇一頁注③、六〇二頁注⑤等に引用せられた文獻を参照せられた。なほアジア北族に於ける十二獸環の使用は、從來五

八四年突厥が隋に送つた書面に辰年九月十日ときまひが最も古く、その次に最近 P. A. Boodberg 氏によつて紀元三世紀頃より溯り得るものと明かされた (Marginalia to the Histories of the Northern Dynasties, I-2, H. J. A. S. III, 1938 東洋史研究四卷五四九—五五〇頁に見える宮川尚志氏の紹介参照)。

5 Chinese-Tibetan Borderland 關係西籍の要領のよき目録は

G. B. Oessy, China's Geographic Foundations, N. Y. & Lond. 1924 1st ed. pp. 422-423 漢籍と云ふは吳五年「西藏圖籍錄」・傳成鑰「西藏圖籍錄補」(萬貫四、二)等参照。なほ甘肅省の未開人の生活に就つては J. P. Dolis: La vie chinoise dans la province de Kan-sou (Chine), Anthropos, X-XI 1915-1916, SS. 68-74, 466-503, 726-757 同氏に就つては Encyclopaedia of Islam, Kan-su 條及び注①の文獻なるを参照。

6 H. A. Jäschke, A. Tibetan-English Dictionary, Lond. 1881. Phonetic Table. 參照。Kozlov 氏は Kham 地方の調聲に於てその言語には及ばなかつたものと云ふ (P. K. Kozlov, Mongoliya i Kam, I, 2, S. Peterburg, 1906; Geographical Journal, Vol. XXXI, 1908, pp. 402-415, 533-534 等)。

7 Lahul 等チベット高原周邊チベット語の古形の存するに就つては G. de Roerich, Dialects of Tibet, The Tibetan, Dialect of Lahul, (Tibetica 1) N. Y. p. 27 發聲學博士「チベット語」(クック問題講座「民族・歴史編」二)三六〇頁参照。

8 T. P. 1914, p. 86. この問題は華夷譯語其他に見える語彙などを中心として更に詳細の研究せられなければならぬ。